

蛇
と
投石

岩田宏

草思社

蛇
と
投石
岩田宏

草
思
社

蛇と投石

1981 © Hiroshi Iwata



著者との申し合わせにより検印廃止

1981年5月11日第1刷発行

著 者 岩田 宏

装幀者 平野甲賀

発行者 加瀬昌男

印刷者 山田 博

発行所 株式会社 草 思 社

〒150 東京都渋谷区神宮前4の24の10

電 話 東京 03(470)6565 振替東京 7-23552

印 刷 三陽社／製本 大口製本

蛇と投石
目次

蛇 7

投石 11

吾亦紅の丘 13

きもだめし 17

鉄の魚 24

未来の古文書 41

過去の古文書 44

女郎蜘蛛 61

宿直室 79

*

囚われた女 105

*

ある草稿 173

赤道に近い所で
204

感情との戦い
229

ボーボー
241

*

おいらん物語
251

待ちくたびれて
269

島の展望台
298

*

マルタとノーラ
321

蛇と投石

蛇

冬の旅人は気弱で疲れやすい。風をさえぎる大きな窓ガラスに、日ざしがくまなくふりそそぐのを、見るだけですぐ眠くなる。ざわめきを掻きわけて首尾よく窓ぎわの席に坐り、眼下の船着場を眺める。船着場の先にひろがる湖水へ、湖をふちどる森へ、そのむこうの稜線へと視線を移せば、からだも心もこの板ガラスに捉えられ、雁字がらめにされたのを感じる。この束縛には痺れのような快さがあって、眠りへの滑り台はいっそう傾きはじめる。

遠のいてゆく、厨房の叫び声、ステンレスの衝突音、香辛料の攻撃も、テーブルの黄色も。ここに自分があり、かしこに湖水があり、中間には魔術的な板ガラスがあり、その三者のみが世界のすべてであれと、だれかが呪文をとなえている。かと思えば、ふと醒めた者のしじらしさで呪文は訊ねる。お前はそれほどにも衰えたのか。ここはただのがさつな食堂ではないのか。魔のガラスは単なる窓だろう、と。いずれにせよ、ざわめきはこの上なく執拗で、厚くなり薄くなり、濃くなり淡くなり、その波の寄せ引きに身をゆだねていると、珍しく感謝のきもちが湧きおこるのだ。一介の行楽者、眠くてたまらないひとりの男を、見逃してく

れてありがたい。こちらでも眠さゆえに行楽のざわめきを見逃すという、これは恐らく単純なやりとりなのだろう。

ごらん、あそこでも罪を見逃されて、遊覧船が船着場から離れる。胸騒ぎを隠し、とりすました静かさで、ゆるゆると遠ざかってゆく。あのなめらかさは、あとに残された棧橋を眠気へ誘わずにはおかないだろう。日の光は湖水を撃ち、照り返しの中心に棧橋がある。さざなみは数千のきらめきとなって、揺れ動きながら太陽の位置を確かめる。しあわせな棧橋、さざなみのきらめきに抱きしめられて。どんな気まぐれ、めぐりあわせか、そのしあわせをゆるすのは。

畳すれすれの低い位置から眺めると、そいつはこんもりと盛りあがって見えた。それにしても尻を上げ、からだをねじり、頭だけは黒ずんだ畳に押し付けんばかりの、なぜこんな不自然な姿勢をとらねばならないのか、自分ではどうしても分らない。初め、口も目も塞がれていると思ったが、塞いでいたのは己れの手だった。視野を開いても、背景に古障子のうすらあかりが見えるだけで、こんもりしたものはまだ影のなかにある。

にじり寄った。肘が畳表にこすれて、熱い屈辱を感じながらにじり寄った。暗い部屋のかには、少なくとも三通りの匂いが立ちこめていた。漬物の匂いと線香の匂い、それにゴムの灼けるような、または硫黄の焦げるような出所不明の悪臭である。それらの匂いから生活と吊いと、何らかの異常事態とを辛うじて推理したが、あとさきや具体的なつながりは皆目

分らず、驚きや恐れは少しも感じられない。すべてはあるがままにあり、なるべくしてなったのだろう。くらやみは無関心そのものだ。ただ肘の痛みと屈辱だけは明白であり、にじり寄るのもそのためである。

屈辱というより、あるいは不審の念だったかもしれない。部屋や匂いが不可解なら、こんもりとしたものは更に不可解であり、己れの不自然な姿勢は全く納得しがたかった。うしろの方、どこかで、何かきらめいているものがあつたのを、おぼろげな思い出のように感じ、自分は本来そこに属していた筈なのだと思う。だがこのうすくらがりや匂いは圧倒的であり、逆らうことは今も昔も封じられている。そこで不審の念はみるみる憤りに変った。もう憤りの対象にならないものはない。畳も、煤けた障子も、ぶざまな自分自身も。にじり寄る速度はますます速まった。

突然、こんもりと盛りあがつたものは目の前にあり、その正体が明らかになった。それは脇腹を下にして向うむきに横たわった女の死体だ。草色のスカートの裾から素足がのぞいている。ブラウスに重ねて、梵字を染め抜いた邪教の法被を羽織っている。両手は何かに縋るようなかたちに投げ出され、畳の上で冷えきっていた。しかも、これは年来の女友達なのだ。死体の頼りなさとしみが惻々と伝わってきた。もう憤りや不審の跡形もなく、悲しみだけが耐えきれぬ寒さのように胸を締めつける。女友達の動かぬ背中を見つめながら、楽しかりし日々を思い出してみようか。ことばが交され、酒が飲み干され、笑顔はともすれば消えがちだった。だが一部始終を描いた画布はもはや遠くできれぎれに引き裂かれ、この寒さに雪

のひらとなって死体にふりかかった。

待て。死体ではない。背中や手足は間違いなく冷たいのに、まだ死にきれない顔面が、渾身の力を頸筋にこめて振り向こうとする。断末魔の細い笛の音。噴出する恐怖。あわてて飛び退いたが、恐怖の黒い飛沫が口に入った。苦い恐怖を嚥み下すのと同時に、吐き気のように腹立ちがこみあげてくる。くそ、死にぞこないめ、あたまを潰しておけばよかった。こうと知ったら、あたまを……

……潰しておけばよかったと舌打ちしながら、目はもう湖水の照り返しを楽しんでいる。動悸はガラスの内側のざわめきに溶けて、行楽者たちに見逃される。どんな気まぐれ、めぐりあわせか、このしあわせをゆるすのは。しあわせな棧橋、さざなみのきらめきに抱きしめられて。うしろの方、どこかで、何か噴出する黒いものがあったのを、おぼろげな思い出のように感じるが、このきらめきと感謝のきもちは圧倒的であり、逆らうことは今も昔も封じられている。

投 石

深夜、宝塚劇場の角を曲ると、才隼頭の職人風の男がしきりに石を投けている。どこから拾ってきたのだろう、粒の揃った丸い小石を次々と有楽座の屋根めがけて抛り上げ、カラコロと転げ落ちる白い小石は、まるでピンボールマシンだ、往來の絶えた通りのあちこちで乱反射して、ブティックやアメリカンファーマシーやエールフランスの暗い巨大板ガラスを脅かす。見よ、有楽座の屋根は芳流閣のように深く反った瓦葺きで、犬塚信乃と犬飼見八ではない、白と黒、一つがいの猫がその高みでまぐわいせんとしている。矢継ぎ早の投石にたまりかねたか、とうとうまぐわいを諦めた黒猫は、いくぶん足を纏れさせながら通りに跳び下りた。しかし日比谷公園方面へと一目散に逃げて行くそいつめがけて、男はしつこく投げつづける。みごとにアンダースロウ。聴け、この坂東太郎のアスファルトの表面を水切りのように跳ねて獲物を追う小石の響きを。

どんでんどんでんと夢が改まり、猫と入れ違いに警官隊が迫って来る。日比谷映画の脇で、

逃げるきみはコンクリの小さなかけらを拾い、振り向きざま投擲する。騒乱のなかにも一瞬の静けさがあり、あいにくそれが命中の瞬間と一致した。コンクリのかけらは一九五二年の灰色の鉄兜にぶつかり、カチーンという音が響きわたる。そのけたたましさに怯えて、あたりを見まわせば、うわあ、デモ仲間から取り残されてきみは一人だ。蒼くなって、きみは逃げる。とちめんぼう。たそがれの焼鳥の煙のこもるガードを抜けて、五月一日の銀座のふところへと、一目散に。

吾亦紅の丘

朦朧車夫は吾亦紅の丘で目醒め、伸びをしながら、隣接する現在の丘を見やる。ここを立ち去るのはいかにも惜しい。あちら、現在の丘には一木一草も見当らず、赤い土が漫然とひろがっている。

赤茶けた丘をめぐってゆるゆる登る舗装道路には、大小さまざま、色やかたちもまちまちの高潔な車たちが一列に連なり、西空を背景にでこぼこのシルエットと化している。現在の丘の頂の懐かしい音楽堂では、今夜、十年に一度の高価な催しが行われるだろう。

懐かしい音楽堂の前のささくれたベンチに、さて、朦朧車夫は腰を下ろして煙草をくわえる。隣のベンチでは、白人の男が黄色人の女を吐っている。傍目には二人仲良くパンを口へ運びながら、白人の男の吐責はながながと続き、黄色人の女は突然立ちあがって、二人のパンを荒々しく屑籠に投げ捨てると、懐かしい音楽堂の入口へ走る。白人の男は狼狽してあとを追う。

「いいぞ、いいぞ」とわめいて、ささくれたベンチの蔭から日焼けした酔いどれが起きあが

る。「それでいいんだ、もっとやれ。遠慮すんな。昔のパン助は偉かった。なあ」日焼けした酔いどれは目を光らせて、だれにともなく同意を求める。

目立たぬように朦朧車夫はその場から離れる。高潔な車の群や、高価な催しからできるだけ遠ざかり、うつむきがちに、人影のまばらな所、空罐やビニール袋の散らばっている所をそぞろ歩きして、ふと、思いもかけぬ発見に心が躍る。この現在の丘にも僅かながら吾亦紅があるということ。翳りがちな赤茶色の斜面に貴重な数個の紅。

喜ぶな、と朦朧車夫は自らに警告する。心の弛みが事態の豹変を招いたことは一度や二度ではない。腰をのばして仰ぎ見ると、案の定、懐かしい音楽堂は跡形もなく、その代りに六角形の監視塔が夕空に聳えている。

六角形の各辺に一人ずつ観光客が立ち、双眼鏡で彼方の平原を観察している。それぞれの観光客の足許には、迷彩服を着た兵士が一人ずつ腹這いになり、眉を引きつらせて銃を構え、指は引金にかかっている。

手頸から肘まで、数え切れぬほどの腕輪をはめた肥満体の婦人が、双眼鏡のなかに見える光景をそのまま口走る。

「男、男、青年、男、少女、婦人、青年、青年、子供、まあ、女、女、老人、男」

双眼鏡を目に押しあてた肥満体の婦人の顔の下半分で、下唇だけが動く。

「みんな後手に縛られている。後手に縛られて、数珠繋ぎにされている。縄は股のあいだをくぐらせてある。歩いている。みんな素っ裸で歩いている。まあ」